

---

# ゼロの使い魔～虚無のお兄様～

貴族

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔く虚無のお兄様く

### 【Nコード】

N4321W

### 【作者名】

貴族

### 【あらすじ】

ヴァリエール家の長男は訳あり！？

(多分)

魔法の才能に恵まれながらも、彼には過酷な運命が待ち受けている！  
(予定)

しかし、彼の傍らには双子の妹や、大切な仲間、愛する人の姿が！  
(恐らく)

## プロローグ―物語の始まり―（前書き）

インスピレーションの赴くままに書いたモノです。

ケータイで暇な時に読める程度の文字数です。

## プロローグ 物語の始まり

「彼が……件の子ですか…」

「はい、既に受け入れ先も決まりました。」

「それは良かった。」

「……の……ですからね。」

「苦労しましたね…。」

「それで、彼の名前なのですが…」

「今まで通りで良いのでは？」

「しかし、あれは仮で付けたゲルマニア人の名前で…」

「訳ありますから問題無いですよ。」

「そうですね。では、引き渡しに言って来ます。」

俺の名前はレオハルト・ホロフェルネス・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……という事になっている。

俺はトリステイン王国の貴族であるラ・ヴァリエール公爵家の一人息子…という事になっている。俺が五歳の時だ。

親だと思っていた人から、「お前は本当は私の子では無い」と言われた。

衝撃だった。

あの日から、俺は何も信じられ無くなった。

親だと思っていた人は他人で、自分の名前だと思っていた物が適当に付けられた物だったんだ。

あれから三年。

俺は今だに両親“だった”人とは殆ど口を聞いてない。

姉だった人が二人いるが、その二人も同じだ。

ただ…事情を何も知らない、双子の妹という事になっている彼女は例外だ。

妹の名前はルイズ。

早朝、俺は日課である魔法の練習をしていた。

「デル・ウィンデ：」

風の魔法、エア・カッターのスペルを唱える。

「ウル・カーノ！」

更にもう一つ、火系統の発火のスペルを唱えた。

俺は少々特殊なメイジらしく、複数の杖と契約が可能らしい。

更に、俺はドットメイジだが二本の杖を使い、二つの魔法を掛け合わせラインクラスの魔法を使う事が出来る。

「フレイム・カッター！」

炎を纏ったエア・カッターが、藁人形を引き裂き、燃やし尽くした。

俺は毎日、こうして魔法の腕を磨いている。

理由は簡単だ。屋敷に居たく無いから。

トリステイン王国にはトリステイン魔法学校という所がある。

そこは全寮制の学校で、ラ・ヴァリエール領から離れた場所にある。

つまり、そこに入学すればあの人達と顔を合わせ無くてすむのだ。

以前、家出をした事が合ったが、数時間と経たずに捕まった。

俺の母親だった人はスクウェアアクラスの風の使い手で、簡単には逃がしてくれないのだ。

偏在を使って囲まれた時は死を覚悟した程だ。

その時言われたんだが：「どうしてもここに居たく無いなら、貴方がラインクラスのメイジになった時にトリスティン魔法学校への入学を許可します」との事だ。

その日以来、魔法の特訓を毎日している。

のだが…。

「お兄様！」

来たよ……

「どうしたんだルイズ？」

妹のルイズ…

俺が魔法の練習をしていると彼女が必ず邪魔をしてくる。

「えーと……街に行きたい！」

邪魔する理由の殆どが突拍子の無いモノで対応に困る。

「買物でもしたいのか？ 悪いが、金なら無いぞ。」

訓練の手を止め、ルイズの我が儘に応える。

「何も要らないから！ とにかく街に行きたいの！」

「俺とルイズの二人じゃ無理だ。アノ人達に頼んで連れて行って貰え。」

言うまでも無いが、俺は両親だった人をアノ人達と呼んでいる。

「お兄様！ アノ人達なんて言っては駄目よ！ お父様とお母様でしょ！」

「…うるさい！」

俺は思わず大声を出してしまった…。

「…ひう！」

ルイズが今にも泣き出しそうになっている。

「ご…ごめんな、ルイズ…」

慌ててルイズを泣き止ませようとする。

ああ、今日もまともに練習出来なかったな…。

俺は遅い朝食を取る為に食堂に向かった。

ラ・ヴァリエール家では食事は家族全員で取るのが決まりだが俺は例外だ。



母親だった人が最初は反対していたが、父親だった人が認めてくれた。

「毎日手間を取らせて悪いなジェローム。」

「とんでもありませんよ、レオハルト様。」

執事のジェロームは使用人の中で唯一事情を知っていて、色々相談に乗って貰っている。

実はジェロームもメイジで、時々魔法の稽古を頼んでいる。

「聞いてくれよジェローム。今日もルイズに邪魔されてさあ…。」

「やはりそうでしたか。ルイズ様が今にも泣き出しそうな顔をしておりましたよ。」

慰めた筈なんだけどな…

「そうか…。今日はちょっと感情的になってしまったからなあ。」

「聡明なレオハルト様らしからぬ失態ですな。」

「毎日邪魔されたらこうもなるさ…。」

ルイズじゃなかったら魔法を食らわせてやるんだがな…

「……レオハルト様。ルイズ様がどうして毎日練習の邪魔をなさると思いますか？」

「は？」

俺はジェロームの質問の意味が解らなかった。

その質問ではルイズが意図的に俺の邪魔をしている事になっている。

「どういう事だ？」

「ルイズ様はレオハルト様の秘密をご存知ありませんが、レオハルト様がラインメイジになったらトリステイン魔法学院に入学するかどうかを知っているのです。」

成る程……そういう事だったのか…。

「ちょっとルイズの所に言ってくる。」

「恐らく、何時もの小船かと。」

「ありがとうジェローム。」

ジェロームの言葉に従い、中庭の池を目指す。

「見付けた！」

池の真ん中に小船が浮いていた。

俺は杖を一本取り出し、魔法を唱える。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ」

フライを使い小船に近付く。

俺はなるべくルイズの前では魔法を使わないようにしているが今回は例外だ。

何故ルイズの前で魔法を使わないのかと言うと、ルイズは魔法が使えないからだ。

ルイズは魔法を唱えると何故か何時も爆発してしまう。

「ルイズ。」

「お兄様……！」

「なあ、ルイズ。ルイズは俺がラインメイジになつたトリステイン魔法学院に入学するのを知っているんだってな。」

「……………」

「だから毎日練習の邪……練習中の俺に話し掛けて来ていたんだな。」

そこまで言ったところで、ルイズが泣きながら俺に抱き着いて来た。

「お兄様！」

俺は慌ててルイズを抱え、小船に乗った。

流石に、ドットクラスのフライでは自分とルイズは支えられない。

「ごめんなさいお兄様……。私…お兄様と離れるのが嫌で…それで…」

「ルイズ…」

「それに、このままお兄様を行かせてしまつたら…お兄様は二度とお父様とお母様と仲直りしないと思って…！」

「…事情を知らないとはいえ、そんな事まで心配していたのか…。」

「解つたよルイズ。俺は、ルイズと一緒にトリスティン魔法学院に入学するよ。それなら良いだろ？」

「お兄様…」

「となると、後七年ぐらいかな。」

「お兄様…大好き！」

「ルイズ！ 何でいきなり愛の告白に……って落ちるって！」

でも、なんだかんだで俺もルイズの事が好きなんだよな…。

それに、俺達は本当は血が繋がって無いから……もしかしたら…

## 第一話く妹の苦悩く

早朝。

今日も今日とて魔法の練習をする。

しかし、今日は……いや、今日からはいつもと違う。

「始めようかルイズ。」

「はい、お兄様！」

そう、ルイズも練習に参加するのだ。

しかし、始めようにもどうしたものか…。

ルイズは系統魔法はおろか、コモンマジックすら爆発する始末。

「とりあえず、簡単なライトからやってみるか。」

「はいお兄様！」

ライトはコモンマジックでも初歩的なモノで、杖の先に光を燈すものだ。

「まず、手本を見せるからな。ライト！」

突き出された杖から、光がはっせられた。

「光を燈すイメージを持つのが重要だ。」

「解りました……ライト！」

ルイズが俺に向かって杖を振った。

その瞬間、ライトの魔法とは別の光が俺に向かって飛んできた。

「ちょ……え、エア・シールド！」

杖二本を使い、ラインクラスのエア・シールドで防御するが、焼け石に水だった。

「ぎゃあああああああ！」

「お兄様あああ！！！」

凄まじい光に飲まれ、俺は気を失った。

「……様！ お兄様の容態は！？」

「大丈夫だ。心配いらないよルイズ。」

「う……」

「お兄様!？」

ルイズ……？

俺……何が？

「良かった…お兄様に何かあったらと思ったら……私……。」

「ル…イズ…」

靄のかかった意識が少しずつ晴れてきた。

すると、周りの状況が見えてきた。

俺は、自室のベットに寝ており、その横でルイズが心配そうに俺の手を握っていた。

そして…ルイズの隣には…

「気分はどうだ？」

「アンタ……! 俺の部屋に勝手に入るな!」

父親だった人が立っていた。

「無茶を言うな、入らなければ治療出来ないだろう?」

っ……!

「アンタが俺を治療したのか!? 余計な事をするな!」

「お兄様、それは私が…!」

「自分の子供を親が治療してはなんなのか?」

「アンタがそれを言うのか…?」

ルイズが、俺とこの人との会話の意味が良く解らないようだ。

「……。」

黙るのか…

「出てってくれ!」

「……わかった。」

一言、それだけ言うと、この人は出ていった。

「お兄様……ごめんなさい…私がお父様に治療を…。」

「ルイズ!」

「は、はい!」

「今日は失敗してしまっただけどいつか、絶対出来る日が来るから、諦めずに頑張ろう!」

「お兄様……。はい、頑張ります!」



……いつか…ルイズにも本当の事を言わなければならない日が来るのかな…

……そうしたら…ルイズはどんな反応を…。

ルイズの部屋。

「はぁ……。またやっちゃった…。」

先日の私の魔法の失敗でお兄様に怪我をさせてしまった日以来、私はお兄様とお父様を仲直りさせようと色々な事をしてきた。

例えば、お父様とお兄様、二人には内緒でそれぞれをお茶に誘った。

お父様が先に来て、後からお兄様がやって来たのだけど、お兄様はお父様の顔を見た瞬間に私の企みを理解したのか、直ぐに部屋に戻ってしまった。

次は二人を買物に誘った、前回の反省を生かして、事前にお兄様にはお父様も一緒だと伝えた。

始めは嫌がっていたけど私が泣いた振りをしたら慌てて承諾してくれた。

お兄様ごめんなさい。ルイズは嘘をつきました。

けど、結局二人が会話をすることは無かった。

その他にも沢山やったけど、どれも上手く行かなかった。

「うう……私は……どうすれば……」

泣いていても仕方ないのは理解している

でも……

「お兄様とお父様の仲裁も出来なければ魔法も出来ない……私は……役立たず……」

どんどんどんどん悪い方向に物事を考えてしまう……。

「泣いているのかい？ ルイズ」

声がした、男の人の声。

お兄様じゃない、お兄様より年上の声、でもお父様じゃない。

「僕だよルイズ。」

「子爵……様……。いらしていたのですか……？」

この人は近所の領地に住むワルド子爵。

そういえば、今日は子爵様がいらっしゃると聞いていたのを忘れていた。

理由は…

「久しぶりの再開なんだ。もう少し喜んでくれよ、僕のルイズ。僕の婚約者！」

そう…：私は、この人婚約者…。

私のお父様とこの人のお父様が決めた事だ…。

「申し訳ありません…。」

好きでもない人との婚約…。

私と双子のお兄様には婚約者なんて居ないのに…：何で私には…。

中庭。

「なに！？ ワルド子爵が来ているのか！？」

「はい、先程到着されて今はルイズ様の部屋かと…」

ジェロームにワルドが来っていると知らされた俺は、怒りに奮えていた。

「あのロリコン子爵があ！ 先ずはアノ人達に挨拶に行くのが礼儀だろ！ こともあろうにルイズの部屋だとお！？」

「レオハルト様、くれぐれも屋敷の中で魔法は使わないで下さい。」

「それはあの変態子爵の態度次第だ！」

その後、ワルドに魔法をぶっ放した俺は、母親だった人によって教育されてしまった。

## 第二話〈面倒の始まり〉

あれから七年。

十五歳になった俺とルイズはトリステイン魔法学院に入学した。

「新入生代表、レオハルト・ホロフェルネス・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！」

「はい。」

入学前に、形式だけの入学試験で最優秀成績をとった俺は、新入生代表として壇上に立つことになった。

「レオハルト…？　ゲルマニア人なの？」

「でも、ラ・ヴァリエールって…」

「じゃあ、あの人がヴァリエール家の…」

七年たった今、俺は風のトライアングルメイジとなっていた。

そのため、俺は非常に耳が良い。

入学式だというのに、お喋りに興じる者や、寝ている者が俺にはまるわかった。

「この、歴史あるトリステイン魔法学院に……」

しかし…俺はトライアングルメイジになったが…ルイズは未だに魔法が使えていない。

その事もあり、当初、ルイズはこの学院への入学は許可されなかった。

だが、俺が何とか両親を説き伏せ入学する事が出来た。

両親……今、俺はアノ人達をそう呼ぶようになった。

七年も経てば、あの二人が他人の俺をここまで育ててくれた事がどういう事なのか理解できる。

だが、いきなり態度を変える事も出来ず、二人の前ではアンタとかアノ人とか言ってしまう。

「最後になりましたが、これからお世話になる、先輩、先生方、何卒、ご指導ご鞭撻の程、よろしく願います。」

当たり障りの無い、平凡な言葉で挨拶を締め括った。

つもりだったが……

なんだ？ 必要以上に拍手されているような？

得に女の子から…

気になった俺は耳を澄ました。

「素晴らしい挨拶ですわ…。」

「同じ新入生とは思えない」

「カッコイイ…」

「ああ…綺麗な金髪…」

なんか…挨拶とは関係ない事言ってる奴が居るような…

というか、俺の髪は親父や姉さんの金髪と比べて、艶が無く、少しくすんでいる。

まあ、他人だからな…。

いや、しかし…。この反応はよろしくない。

「うゝゝ！」

聞こえるか…？

ルイズのこの歯を噛み締め、嫉妬の炎を燃やす声を。

よろしくない、非常によろしくない。

その後、ルイズの機嫌をとりつつ、教室に向かった。

案内された教室で、今後の予定や授業について説明された。

休み時間となり、皆それぞれ友人を作ろうと談笑を始めた。

ルイズの元にも何人か近付いて行ったようだ。

「やあ！ レオハルト君！」

馴れ馴れしい優男が話し掛けて来た。

見るからに軟派な奴だ。

「誰？」

「おいおい！ クラスメイトの顔と名前を忘れてしまったのか？」

さっき出会ったばかりでしかも自己紹介は…さっきやったか…

ともかく、頭の悪そうな奴なのは違いないな。

「悪い、人の名前を覚えるのが苦手なんだ。」

本当は興味の無い事が覚えられないんだけどな。

「そうか、僕はギーシュ・ド・グラモンだ。君に一つ忠告しようか  
と思っ

あー…嫌な予感がすんな…

「入学試験で成績一番とか何とか知らないけどね。余り調子に乗らないで貰いたいものだね。」

成る程、この軟派野郎は、入学式で俺の挨拶が受けた事が気に入らないようだな。



しかし、一応ラ・ヴァリエールの息子という事になってる俺にステエ態度だな。

いや、グラモン……？

まさか、グラモン元帥の…。

ともかく、やはり関わりを持ちたく無いな。

数日後。

今日は初めての魔法実習の日で、俺は少しドキドキだ。

理由は簡単。

ルイズの魔法が初めて人目に曝されるのだ。

ま、俺が緊張しても仕方ないんだがな…。

「それでは皆さん、本日より魔法の実技を行います。まずは簡単なコモンマジックのライトから。」

正直、風のトライアングルである俺には退屈な内容だな。

「では、まずは私が手本をお見せします。『ライト』…では、皆さんやってみて下さい。」

俺は適当に杖を振り、けだるそうに魔法を唱えた。

周りのクラスメイトも面倒臭さそうな奴が多い。

それと対称的に、ルイズの表情は真剣そのものだ。

意を決したように、ルイズが杖を構えた。

俺は咄嗟に杖を二本構えて、エア・シールドのスペルを唱え始める。

俺はトライアングルだが、杖二本と多くの精神力を消費してスクウエアクラスの魔法を使える。

「大丈夫…出来る筈……」

ルイズが杖を振る。周りのクラスメイトの多くがその様子を見ていた。

「ライト！」

瞬間、やはり普通のライトよりまばゆい光を上げた。

実はクラスメイトの殆どがある勘違いをしている。

皆、ルイズも優秀なメイジであるという勘違いだ。

入学試験トップの成績を持つ双子の兄の存在。

名門、ラ・ヴァリエールの三女であるという事。

そして、必要以上に勿体振って魔法を唱え始めた事。

凄まじい輝きを放つ杖。

色々な要因が重なり、勘違いを生み出している。

「エア・シールド。」

衝撃に備え、スクウェアクラスのエア・シールドを張る。

次の瞬間、限界を超えた光を放っていた杖を中心に爆発が発生した。

「今日はまた凄いな…。」

備えをしていた俺を除き、先生を含めた全員が気を失った。

「今日はもう授業は無理だな。」

死屍累々。

教室の惨状はその一言に尽きる。

### 第三話　憂鬱な学院生活

あの惨劇から翌日。

皆のルイズに対する評価は一変していた。

一夜にして名門貴族の三女から、名門貴族の落ちこぼれとなった。

「聞きましたか？」

「ええ、ミス・ヴァリエールの事でしょ？」

「何でも、魔法の失敗で教室を吹き飛ばしたとか。」

俺は聞き耳をたてるのをやめ、溜息をついた。

期待が大きかった分、反動も大きいな。

「……………」

ルイズの方を見ると、一人で俯いていた。

周りには、昨日ルイズに話し掛けていた子が居たが、話し掛ける様子は無い。

正直、見ていて気分の良いモノでは無い。

一言、文句をいってやりたい所だが、ルイズが耐えているのに俺が何かする訳にはいかない。

「仕方ない……」

慰めの言葉でもかけようと、俺は席を立った。

が…立ち上がった時、ある奴に話し掛けられる。

「やあ、レオハルト君！」

出たよ…

「ギーシュ・ド・グラモン……悪いな、君と話をしている暇は無いんだ。」

「まあ待ちたまえ、手間は取らせ無いよ。」

ちっ…面倒な……

心の中で悪態をつきながら、渋々ギーシュの話を聞く。

「今日の昼は空いているかな？」

「空いているが…」

「なら、一緒に昼食をどうかな？」

ハハハ…。

野郎から昼食に誘われても気持ち悪いだけだな。

冗談にもならない。

「わかった…。昼に改めて誘ってくれ。」

空いていると言ってしまった以上、無下に断る訳にはいかない。

しかし、昼飯を一緒になど…。まるで友達だな。

まさか…コイツは俺と友達になりたいのか…？

とてもそんな風には見えないが…。

「良かった。では、失礼するよ。」

キザったらしい仕種をしながらギーシュは去っていった。

「あの人の神経を逆なでするような言動はなんとかならないのか？」

ともかく、次の授業の準備でもするかな…。

次は確か系統魔法の実技だったような…。

土以外なら良いんだがな。

実は俺は土系統の魔法が一切使えない。

ルイズのように爆発こそしないが、どんな呪文にも一切反応しない。

また、水系統も得意では無く、ドットクラスだ。

火系統には少々自信がありラインクラスの魔法を使う事が出来る。

「では、授業を始める。」

担当の教師が入って来たようだ。

確か、彼は土の使い手だったような…。

最悪だ。

「今日は一通り土系統の魔法を見せた後で、諸君にも実演してもらう。」

実演……と聞いて、ほぼ全員がルイズの方を見た。

その様子を見て、先生が一言訂正を加えた。

「あー、いや。全員というわけでは無い。こちらで指名しよう。」

その訂正に、皆が安堵の息を漏らした。

腹の立つ態度だが、同時に俺もいろんな意味で安心しているので文句は言えない…。

その後、先生がいくつか簡単な魔法を見せた。

「次は諸君にやってもらおうか。では……」

先生が教室を見渡した。その時、俺と目が合う。

はは……スゲー嫌な予感…。

「うむ、ミスタ・ヴァリエール。君にお願いしようか。」

ちっ……

「申し訳ありません先生。僕は土系統の魔法は使えないのです。」

恥を忍んで先生に言う。

無い袖は振れない、見栄を張っても仕方ない。

「そうか…。」

途端に教室がざわつく。

聞き耳をたてた訳では無いが、恐らく有ること無いこと噂しているのだろう。

やっぱり兄妹そろって魔法が使えないのかとか、入試一位は何かの間違いだとか……そんな所だろうな。

曲がりなりにも、ヴァリエールの名前を背負っているんだ、こういうのは勘弁なんだが…。

まあ、どうしようも無いしな。

「ならば……誰に頼むか…」

先生も俺ならば問題無いと思って指名した筈だ。



当てが外れて困っているようだ。

「先生！　ここは、このギーシュ・ド・グラモンにお任せを！」

ギーシュがやはり格好をつけて名乗りを上げた。

「おお！　ではミスタ・グラモン、お願いしよう。」

ギーシュは俺の方に少し見下したような視線を向けると、皆の前に出た。

すると、薔薇の花を摸した杖を取り出し、構えた。

随分と良い趣味をしているようだが…。

「ワルキューレ！」

杖を振るうと、薔薇の花びらが宙を舞った。

すると、その花びらが甲冑を着た戦乙女の形の人形になった。

「おお！　スゲエ！」

「カッコイイなあ！」

「素敵ですギーシュ様！」

教室の各所で歓声が上がった。

俺への落胆も手伝い、皆のギーシュへの評価は上がっているようだ。

「ま、これくらいは普通だよ。」

明らかに俺を意識しているギーシュ。

正直、そんな事はどうでも良かった。

でも、この後のギーシュとの昼飯で何を言われるかと思うと…

はぁ…面倒な…。

#### 第四話く初めての決闘く(前書き)

携帯壊れちゃった…てへ

マジ死ねる…

#### 第四話く初めての決闘く

さて、やって来て欲しくない昼休みが来た訳だが…。

俺はギーシュに連れられ、食堂にやって来た。

「しかし…、君にはガツカリだよ！ 入学試験の最優秀成績者で、ヴァリエール家の長男が！ まさか魔法すらまともに使う事が出来ないとは！」

コイツ…：良く本人にそんなボロクソ言うな…。

やっぱりコイツ頭悪いな。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

給仕のメイドが注文を取りに来た。

有り難い、ギーシュの話が中断された。

「僕はこれにしようかな。」

「俺はオススメを適当に。」

「おいおい…食事にも興味が無いのかい？ それでも貴族かね？」

お前に言われる筋合いは無い

が……訂正すんのが面倒なんで無視だ。

しかし、だんまりを決め込んだ俺を余所にギーシュは喋り続けた。

自分の土魔法がいかに優れているとか、小さい頃から兄と魔法の練習をしていたとか。

半分以上聞き流しながら、料理が来るのを待つ。

するとギーシュの奴は、俺が何も言い返さないのを良いことに、どんどん調子に乗っていった。

「しかし！ 君達双子はまともに魔法も使えないのに何故この学院に来たのかね？」

次第に俺とルイズの……いや、主にルイズの悪口を言い出した。

「しかし、君の妹は酷いね！ コモンマジックでも初歩の初歩であるライトで、まさか爆発事故を起こすとわ！」

調子に乗りやがって…キザ野郎が！

ここが食堂じゃなかったらぶん殴るところだ。

「君の妹は胸も無ければ、魔法の才能も無いのかい？」

……

「ギーシュ・ド・グラモン……」

「どうしたんだい？ そんな怖い顔して？」

自分が何を言ったのか解って無いのか…？

馬鹿も過ぎれば罪だ。

「杖を持って表へでろ。貴様に決闘を申し込む。」

その瞬間、周りにいた他の生徒がざわつく。

「君は…自分が何を…」

ギーシュが喋り終わる前に割り込む。

「御託はいらない。受けるのか？ 受けないのか？」

俺の真剣な態度に、ギーシュも若干気圧されたようだ。

だが、直ぐに人を見下すような微笑を浮かべて喋り出す。

「良いだろう。返り討ちにしてやる。」

俺とギーシュは昼食そっちのけでヴェストリの広場に向かった。

広場に着く頃には、何処から聞き付けたのか、沢山の生徒で溢れていた。

「諸君！ 決闘だ！」

見せ付けるように杖を振るい、決めポーズを取るギーシュ。

ギャラリーに囲まれ、ギーシュのテンションは上がっているようだ。

「目立ちたがりが……」

俺も杖を構え、臨戦体勢をとる。

本当は、二本の杖でスクウェアクラスの魔法を食らわせてやりたいところだが、流石に殺しかねないので止めておこう。

「じゃ、始めようじゃないか。」

ギーシュが決闘を始めようとしたその時。

「お兄様！」

ルイズが人混みを掻き分け、飛び出して来た。

「何をしているんですか、お兄様！？」

「決闘だ。」

「それは状況を見たら解ります！ 私はそういう事を言っているのではありません！」

ルイズは俺の腕を掴み、声を荒げて言った。

「決闘は禁止されているのですよ！ やめてください！」

俺はルイズの腕を振りほどき、ギーシュに向き直る。

「危険だぞ、下がっているルイズ。」

「お兄様……！」

ルイズを無理矢理押しやる

「良いのかい？ 心配してくれた妹の厚意を無下にしてしまつて。」

「お前に心配される筋合いは無い。」

「そうかい。では、改めて始めようか！」

ギーシュの開始の宣言に、ギャラリーが静まる。

皆が固唾を飲み見守る中、最初に動いたのはギーシュだった。

「行け、ワルキューレ！」

杖を振り、先程の授業でも見せたワルキューレを作り出した。

数は八体。

「いきなり八体は大人げ無かったかな？」

ギーシュが何かを言っている間に俺はスペルを唱え終わろうとしていた。



「ウル・カーノ・デル・ウィンデ：」

その時、ルイズが俺の使おうとしている魔法に気付いた。

「いけない：皆伏せて！」

「フレイム・ストーム！」

俺を中心に、火の粉を含んだ竜巻が発生した。

その竜巻は徐々に力を増していき、ギーシュのワルキューレを一体、また一体と飲み込んでいく。

「僕のワルキューレが！？」

巻き込まれたワルキューレは、竜巻の中でぶつかり合い、粉々に砕け破片となった。

その破片は、風に飛ばされ、鋭利な刃物として辺りに飛び散った。

「トライアングルクラスの魔法：。」

誰かが呟いたのが聞こえた。

「そんな：！」

ワルキューレを一撃で破壊されたギーシュはうなだれており、俺はギーシュに向かって杖を突き付けた。

「俺の勝ちだ、ギーシュ・ド・グラモン。」

あの決闘の後、騒ぎを聞き付けた教師達によって俺とギーシュは学院長室に連れられ、一日反省室に入りを命じられてしまった。

それは覚悟していた事だし、それくらいで済んで良かった。

曲がりなりにもヴァリエール家の息子の俺と、グラモン家の息子のギーシュ。

俺達が決闘など、下手をすれば両家の問題に発展しかねない。

我ながら軽率な行動だったが、後悔はしていない。

しかし、まだ不安はある。

今回の決闘はギーシュの暴言が原因とはいえ、吹っ掛けたのは俺だ。

ギーシュの奴がグラモン元帥にチクったらと思うと気が気でない。

そうなれば、せつかく反省室送りで済んだのに厄介な事になる。

親父に迷惑をかけるのだけは避けたい。

が…、俺の不安は杞憂だったようだ。

「ハハハ！ レオハルト、君は面白い奴だな！」

ご機嫌取りに適当に話をしてみると、このギーシュ、案外話せる奴だった。

お互い第一印象が最悪だったみたいだが、それがかえって良かったのかもな。

「反省室で何を喋っているんだ！？ 静かにしないか！」

そして、同じ境遇になる事で親近感が湧いたのだ。

そうして、学院での初めての友人が出来たのだった。

朝になり、反省室から出るとルイズが俺を待っていたのだが……ルイズは不思議そうな顔をしていた。

その時、俺達は徹夜明けの変なテンションで肩を組んで殆ど酔っ払い状態だったのだ。

ルイズからしたら、決闘までした二人が一晩で親友のように仲良くなっていたのだ。不思議に決まっている。

## 第五話　二つ名は炎風

ギーシュとの決闘から数日。

あの日以来、何かと連む事の増えた俺とギーシュ。

その日も、ルイズを交えて昼食を食べていた。

「そういえば、来週末は新入生歓迎会だったね。」

話題を切り出したのはギーシュだった。

「そうなのか？」

「おいおい…入学して初めての舞踏会だぞ？　君は魔法と妹以外のモノに興味は無いのか？」

失敬な。

「お兄様は舞踏会や社交界が苦手なのよ。」

ルイズがすかさずフォローしてくれる。

「それはそれで問題じゃないか。ヴァリエール家の跡取りが舞踏会や社交界に興味が無いなんて！」

「別に良いだろ。後、お前は一つ勘違いをしている。俺は、ヴァリエール家の跡取りじゃない。」

「またそんな事言ってる…。最近はお父様とも仲直りしたと思っていたのに…。」

ルイズがやれやれといった様子で両手をあげている。

「仲直りしたんじゃない、積極的にケンカしなくなったただけだ。」

「どういう事だい？」

一人おいてけぼりのギーシュは説明を求めた。

「お兄様はお父様と…というか、私以外の家族とは仲が悪いのよ。」

「シスコンのレオハルトからは考えられないな。」

「誰がシスコンだ！」

ギーシュがとんでもない事を口走ったので直ぐに否定する。

「何を言っている…。僕との決闘の原因だって、僕が君の妹の胸が…。」

「それ以上言ってみろ、今度はフレイム・ストームじゃ済まないぞ…！」

「じよ、冗談じゃないかまったく！」

しかし、歓迎会か…。出ないという選択肢は無いんだろうな…。

……そういや…舞踏会用の服なんて持って来てないぞ…。

「どうしたの、お兄様？」

「いや、舞踏会用の服を家に忘れてきた。」

「「はぁ!？」」

ルイズどころかギーシュも驚く。

「君は……本当に…」

「お兄様…」

「そんな目で見るなよ…」

…悲しくなってくる。

「仕方ない…ここは僕の服を！」

芝居がかった動きでギーシュが提案してきた。

「断固辞退する。お前のその改造制服を見ていたら不安で仕方ない。」

「君は僕の美的センスを疑うのかね!？」

「キザ野郎を信用するなっるのが持論なんだ。」

「何だと…このマスタード頭！」

マスタ…っ！？

「テメエ……決闘だ！ 杖を抜いて表に……！」

「サイレント！」

ドオン…という音とともに、テーブルが爆発した。

「失敗しちゃった。」

「ル…ルイズ……これ…サイレント違う…」

「黙らす効果は……十分…みたい…だけどね…」

結局、服は実家から送ってもらう事にした。今から頼めば間に合う筈だ。

その日の午後の授業で、念願の風系統の実技がやって来た。

風の実技という事で、屋外で、更に別のクラスの生徒も一緒にやるようだ。

俺には至極どうでもいい事なんだが、ヴァリエール家の人間として無視出来ない存在が居た。

「ツェルプストー！」

それに最初に気付いたのはルイズだった。

「ヴァリエール？」

キュルケ・フォン・ツェルプストー。

彼女はゲルマニアの貴族で、ヴァリエール家とは国境を挟んで隣り合わせのツェルプストー家の人間だ。

ヴァリエール家とツェルプストー家はまさに犬猿の仲。

恋人の奪い合いから殺し合い。その確執は半端じゃない。

ま、俺はヴァリエールの血を引いてないから、ルイズや親父達程ツェルプストーを目の敵にしていけない。

「ツェルプストー…まさか、アンタと一緒に授業を受ける事になるなんてね…？」

敵視剥き出しで話し掛けるルイズ。

「授業ねえ…。ちゃんと授業になれば良いけど。」

「何だよ？」

「聞いたわよ、魔法の失敗で教室を吹き飛ばしたらしいじゃない？  
怖いわねえ…」

「う………」



凶星を差され、黙ってしまいうルイズ。

……仕方ない。

ギーシュに目配せし、二人の間に割って入る。

「余り俺の妹をイジメないで欲しいな、ミス・ツエルプストー。」

「あら、もう一人のヴァリエール、炎風のレオハルト様じゃないの？」

炎風？　なんだそりゃ？

「ギーシュ、炎風ってなんだ？」

「君の二つ名さ。僕との決闘以来、君はそう呼ばれている。ちなみに僕は青銅だ！」

「いやお前の二つ名なんて聞いてねーよ。」

「なんだよその言い草は！？」

俺の態度に怒りを表にするギーシュ。

「もしもーし、勝手に盛り上がらないでくれる？」

若干ほったらかしのキュルケ。

「ああスマン。で、何？」

「……何って…。ともかく、炎風だかなんだか知らないけど、火なら私も負けないわよ。余り調子に乗らないでね？」

「どっかで聞いた事あるセリフだなギーシュ？」

「僕もそう思うよレオハルト。」

ルイズとツエルプストーの喧嘩を止めるつもりが、俺とギーシュの喧嘩に発展してしまうのだった。

## 第六話　風の使い手

さて、俺が首を長くして待っていた念願の風の実技授業だが…。

担当教師のミスタ・ギトーが最悪だった。

「今年の新入生は、最悪だ。」

開口一番、ギトーは言い放ちやがった。

「入学書類を見たら、殆どがドットメイジではないか。ラインが数名、唯一のトライアングルは問題児！」

俺の事か。

ギトーの奴は悪態をつきながら渋々と言った様子で授業を始めた。

今回の授業内容は風の基本、フライとレビテーションだ。

俺は杖を二本構え、ギトーの野郎を驚かしてやろうと意気込む。

その時、一人の女生徒が俺より先にフライを唱え飛んでいた。

背の低い、蒼髪が特徴的な少女だった。

ラインクラス…？

いや…どうやら力を抑えているな、トライアングルクラスか。

「ドットにしてはなかなかやるではないか」

何を宣っていらっしゃるんだこの先生様は？

先入観で目が曇っているのか？

「とにかく、この中でも一番若い少女に負けて悔しくないのかね？」

ギトーの生徒を馬鹿にした態度に、頭に來た俺は、全力で飛んでやった。

他の面子はと言うと、ツエルプストーは風系統のメイジでは無いものの、そこそこ上手く飛んでいた。

ギーシュは危なかったが、軽くアドバイスしてやったら大分安定した。

ルイズについては皆まで言わすな。

そういや、俺と蒼髪の少女を恨めしそうに睨みつけている奴がいる。

何だろうな…俺、入学式受けた黄色い声援と熱い視線以外は、全部嫉妬やら何やらばかりだな。

授業終了後、先程俺と蒼髪の少女を睨んでいた奴が、蒼髪の少女に試合を申し込んでいた。

「ミス、あなたに風をご教授願いたいのだが」

その遠回しな言い方に、ギーシュが言った。

「何処ぞの誰かとは違い、優雅な決闘の申し込みだな。」

「どうせ俺は、礼儀作法が欠如してますよ。」

決闘を申し込まれた少女、名前はタバサと言うらしいが、偽名なのは明らかだ。

彼女は、他国からの留学生らしいのだが、留学生の中には身分を隠さなければならぬ人が多いのだ。

大貴族の子供だとか、王族の関係者やら。そういう、人には明かせない事情があるんだろう。

つまり、彼女も身分卑しからぬ人なのだろう。

「人がものを頼んでいるのだ。本を読みながら聞くと、無礼ではないかね？」

どうやら、少々揉めているようだ。

彼女が、決闘の誘いを無視して本を読み続けているようだ。

「成る程、やはり試合となるとどうにも勝手が違うようだ！ そうだな、試合となれば、これはもう命のやり取りだからな！ 授業で飛んだり跳ねたりするのは訳が違う！」

試合を申し込んだ彼、タバサの態度に業を煮やしたのか、彼女に侮

辱の言葉をぶつける。

「何処ぞの誰かと違って、説得力のある挑発だな。」

「うるさいよ！」

しかし、タバサはというと、相も変わらず本を読む始末。

その様子にとうとう諦めたのか、彼は捨て台詞を吐いた。

「どうやら、君が私生児というのは本当のようだ。おそらく母の顔さえ知らんのだろう。そのような家柄のものに嫉妬すれば、僕の名に傷がつく！」

言いたい事だけ言って、彼は立ち去ろうとしたとき、彼女が立ち上がった。

その表情からは、感情を感じられないが…

「あれは…怒ってるなギーシュ」

「怒ってるねレオハルト。何処ぞのシスコンと同じで、家族愛の深い人のようだ。」

俺も終いにや怒るぞ…。

「君のような庶子に名乗るいわれはないのだが、これま作法だ。ヴイリエ・ド・ロレーヌ、謹んでお相手仕る。」

しかし、タバサの方は名乗らない。

「この期に及んで名乗らないとはね！」

「そういや、僕達も名乗らなかったねマスタード頭？」

「何ならやり直すかキザ野郎？」

「手心は加えんよ！ いざ！」

ロレーヌが唱えた呪文は風のウィンド・ブレイクだ。

それに対してタバサは、構えも取らずに棒立ちだ。

ロレーヌはラインメイジだ。

彼のウィンド・ブレイクを打ち消すにはそれなりの呪文を唱える必要がある。

だというのに、タバサはというと杖を握ったまま動こうとしない。

「おいおい……大丈夫か？」

あれをまともに喰らったら、彼女の身体では大怪我するだろう。

俺は最悪、決闘に割って入ろうかと考えていたが、それは不要だった。

タバサは軽く杖をふって、一言、ルーンを唱えた。

すると、ロレーヌのウィンド・ブレイクは方向を変え、魔法を放つ

た本人を襲った。

ロレーヌは自分の魔法で壁にたたき付けられた。

その隙に、タバサは間髪いれずに魔法を唱える。

「ウィンデイ・アイシクルか……やはり、トライアングルクラスか。」

「解るのかい？」

「タイプは違うが、俺も風のメイジだからな。」

しかし、戦闘馴れしているのか、詠唱が素早い。

さて、ウィンデイ・アイシクルは無数の氷の矢を飛ばす魔法だ。

殺傷能力も高い。

が、タバサはロレーヌの身体を狙わず、マントと服を壁に縫い付けた。

ロレーヌは恐怖している。

身動き取れず、杖も無い。後は止めを刺されるのを待つのみ。

既に勝敗は誰の目にも明らかだ、しかし、タバサは手を止めなかった。

先程より二回りは大きい氷の矢を作り、ロレーヌに放った。



「死ぬ！ 助けて！」

しかし、氷の矢はロレーヌの目の前で停止、突き刺さる事は無かった。

ロレーヌは余りの恐怖に失禁、汚ねえ水溜まりを作った。

氷の矢も溶け、自由になったロレーヌは逃げ出そうとしたが、腰が抜けて歩けない。

はいつくぼるロレーヌにゆっくりと近付くタバサ。

小さな身体に、何とも言えない迫力が出ている。

「許してくれ！ 命だけは！ し、試合なんて只の遊びじゃないか！ 命のやり取りだなんてそんな、大昔の事じゃないか！」

「さっきと真逆の事言ってるな。」

そして、タバサは杖を突き出した。

「後生だ！ なんでも言うことを聞くから命だけは！」

タバサはその手に持った小さな杖を指差し、言った。

「忘れ物」

その杖はロレーヌの杖であった。

「ふ……くく……くく……ハハハハハ！ 傑作だ！ 最高のジョークだ！ なぁギーシュ、ルイズ？」

その余りの滑稽なやり取りに俺は笑いを堪えきれなかった。

「はは、確かに傑作だ！ トリスタニアの劇場で披露しても良いな！」

「う……くふふ……お、お兄様、ギーシュ……わ、笑うなんて失礼……ふふ……」

そういうルイズも今にも笑いだしそうだった。

そんな俺達に触発されたのか、周りの生徒も一斉に笑い出す。

中には、本気で笑っていない者もいた。

ヴァリエール家とグラモン家の三人が笑っているから合わしているのだ。

しかし、ロレーヌは、俺達が笑ったから皆が笑いだした……そう思っているだろう。

## 第七話　歓迎の舞踏会

新入生歓迎の舞踏会まで後三日となったある日。

「そういや、レオハルト。君は舞踏会で誰をエスコートするのか決まっているのかい？」

ギーシュが舞踏会の話題を振ってきた。

「そんなめんどい事なんか決めてない。」

ちなみに、ここにルイズは居ない。

「それはいけないなあ。君は、女の子に興味は無いのか？　妹が一番か？」

「またそれか、別に興味が無いわけじゃ無い。」

適当にごまかそうとしていたのに、思わず本音を言ってしまった。

「ほう、どんな女性が好みなんだ？」

なかなか難しい質問だな…。

「そうだな…：好みじゃないが、中途半端が一番ダメだな。」

「どういう事だ？」

「簡単に言えば、胸が小さいならつるぺた、大きいなら大きい、そういうはっきりした子が好きだな。」

「つまり、ルイズ又はミス・ツエルプストーという事だな！」

「ま、その二人は対象外だな。」

あの二人は……な。

「となると……ミス・タバサなんかどうだろう？」

「何が？」

「舞踏会でミス・タバサをエスコートしたらどうかと言っているんだ。」

何を言い出すかと思えば…。

「そんなのめんど……いや、解った。誘ってみるよ。」

俺の返答が意外だったのか、ギーシュがキョトンとしていた。

「何だよ？ 文句あるのか？」

「いや、ちょっと意外でね…。しかし、そうと決まれば早速誘いに行こうじゃないか！」

「行かねーよ。当日、暇そうだったら誘うだけだ。」

俺が冷めた声でそう言うと、ギーシュは大袈裟に残念がった。

恐らく、コイツは俺をナンパ仲間に引き込みたかったのだろう。

「というか、お前はどうすんだ？ 誰か目星はついてんのか？」

「勿論だとも。同じクラスのモンモランシーを誘っている。」

「そんな愉快的な名前の奴なんか居たか？」

俺のふざけた態度に、ギーシュが怒る。

「失礼な奴だな君は！」

お前程じゃない

「クラスメイトの名前くらい、いい加減覚えたらどうだ！？」

「あーはいはい、そのうち覚える。」

ギーシュを適当にあしらうと、俺はある事に気付いた。

「そういや、ルイズの奴はどうすんだろな？」

「君が知らないのに、僕が知ってる訳無いだろ。」

それもそうだな。

そして、舞踏会当日。

「ちっ：ギーシュの奴。会場に着いたと同時に行きやがって。」

当初、ギーシュは俺がタバサをダンスに誘うまで一緒に居ると言っていたのだが、会場でモンモランシーを見付けると直ぐにそちらへ行ってしまった。

「仕方ない。タバサを捜しつつ料理を堪能するか。」

流石、新入生歓迎の為だけあって、料理の種類も数も豊富だ。

「うーむ、実家じゃ。こんな豪華な料理殆ど食った事無いぞ。」

それに関しては、自業自得なので文句は言えない。

「なあ、お前は誰と踊るんだよ?」

「そういうお前は?」

「ミス・ツエルプストーを誘ってみようかな。」

「俺も誘おうと思ってたんだぞ!」

「俺もだ!」

「僕も!」

男子生徒の会話が聞こえて来た。

一番人気の新入生はツエルプストーのようだ。

まあ、あのWonderful Bodyなら仕方ないか。

さて、俺もそろそろ目当ての人を誘いますかね。

「お、居た居た。」

タバサは会場の端の方で、大量の料理と対峙していた。

「こんばんは、ミス・タバサ。」

俺は当初、タバサに話し掛けても無視されるか、適当にあしらわれるものだと思っていた。

「……あなた：ヴァリエールの。」

なので、この反応に俺は困惑した。

「俺の事知っているのか？」

「授業で一緒だった」

素っ気ない返事だが、彼女が返事をしただけで上等だ。

「そうだったな。それと、決闘の時もだ。」

「ん……あの時、割って入ろうとしていた。」

「気付いていたのか。流石は、風のトライアングルメイジだな。」

俺の言葉に、タバサはホンの僅かだが、驚きの表情を浮かべた。

「どうしてそれを…？」

「理由は色々ある。一つは俺がトライアングルだから、君の魔法を使う所作とか、君がウィンディ・アイシクルを使ったから、かな。」

「……そう」

タバサは一言呟くと、そのまま料理に向き直ってしまった。

……

「……………」

……

「……………」

あれ？

会話終了？

「あの、ミス・タバサ？」

「タバサで良い。」

またまた予想外の反応をするタバサ。

「そ、そうか……。なら、俺もレオハルトと呼んでくれ。」

「解った。」

「……………」



「……………」

「……………」

再び訪れる沈黙。

もしかして……これはあしらわれてるのか？

「タバサ、もしかして…俺と話したく無い？」

「そんな事ない。」

「そうか、良かった。」

そこで、俺は本題を切り出す。

「ところで、良かったら俺と踊ってくれないか？」

「どうして？」

「いや、どうしてって言われても……取り立てて理由は無い。」

「なら、踊る必要は無い。」

身も蓋も無い事を言うタバサだが、俺ももともとダンスは苦手なので別に何とも思わなかった。

「それもそうか。なら、一緒に食事を楽しもうか。」

「これは私の分」

更に盛ってある大量の料理を守るように言うタバサ。

「横取りなんかしないって。今、自分の分を取ってくる。」

目的を達成……したかは微妙だが、ともかく、俺は料理を取りに向かった。

料理を選ぶ時、ギーシュからのアドバイスを思い出す。

「さりげなく、好みの料理を持って行くと喜ばれるよ」

……良く考えるとアドバイスでも何でもない常識だな。

ともかく、美味しそうな料理を重点的に二人分……四人分持って行く事にした。

「お待たせ……って。騒がしいが……何かあったのか？」

「わからない」

…ふむ、まあ後でギーシュに聞けばいいか。

今は腹が減っているんだ。

## 第八話　雪風と炎風

翌日、その日は虚無の曜日で、授業は休みだった。

なので、俺は朝から図書館に来ていた。

本を読むのは嫌いでは無い。むしろ好きな部類だ。

子供の時、家族と今より上手くいつてなかった為、毎日魔法の練習や、我流の剣の修業、家の蔵書を読むぐらいしかやる事が無かったからだ。

今日は何を読もうか、等と考えていると、彼女と出会った。

「タバサ。奇遇だな。」

「レオハルト…」

相変わらず無表情のタバサだが、雰囲気は何となく楽しそうだ。

「昨日は楽しかったな。」

「うん」

もう少し嬉しそうに言っても良いだろうに。

まあ、肯定の言葉が聞けただけでも十分か。

「タバサも、よく図書館に来るのか？」

「時々」

「そうなのか。ま、この図書館はスゲー規模だからな。毎日来ても飽きないな。」

「レオハルトも良く来るの？」

タバサから質問が返ってくる。会話の流れとしては普通だが、タバサだと話は変わってくる。

「そうだな、週に二回は来ているかな。」

「そう。」

……やはり、俺が積極的に話題を振らないと会話は続かないようだ。だが、同年の女の子との会話なんてルイズくらいしかない俺には、中々難易度が高いのだ。

とりあえず、俺達二人は適当な本を選び、席に座った。

「……………」

「……………」

タバサは本に集中していながらも、時々こちらを伺っている。

かく言う俺も、タバサが気になり読者に集中出来ていない。

なんだこの状況は？

付き合いたてのカップルか何かか？

カップル……か…

いかん……よく考えたらまるで図書館デートじゃないか!？

急に恥ずかしくなってきた。

動揺した俺は、思わず俯いてしまった。

だから、彼女の接近に気が付かなかった。

「あなた達……やっぱりそういう関係だったのね…」

話し掛けてきたのはツェルプストーだった。

「何の話だ？」

「惚けないでちょうだい。昨日の事よ。」

昨日？ 何かあったのは知っているが、何があったかは知らないな。

「昨日、あなた達二人、一緒に居たわよね？」

俺達二人に対しての質問だが、どう考えても俺が答えるしかないよ  
うだ。

「認めたわね。覚えてらっしゃい。そのうちお返ししてあげるから。」

ツエルプストーは、言いたい事だけ言おうと図書館から出ていった。

ツエルプストーが何を言いたいのか俺にはさっぱりわからない。

「今のは何だったんだ？」

「わからない」

昼、食堂にて。

「という事があったんだが……何か知らないか、ギーシュ？」

俺は、図書館での出来事をギーシュに説明していた。

「ミス・タバサと図書館デートだとおおお！？ 貴様、いつの間にそんな間柄に！？」

「落ち着け馬鹿。俺とタバサはそんなじゃない。聞かれた事だけ答えろ。」

俺の冷めたツツコミに冷静さを少し取り戻したギーシュ。

「むう……昨日の出来事なら、ミス・ツエルプストーのドレスが何者かに破かれるという事件があったな。」

「それは眼福な事件だな。」

俺も若干興味がある。

「まったくその通りだ。」

ギーシュが激しく同意した。

「それで、ミス・ツエルプストーのドレスを引き裂いたのは、どうやら風の魔法のようなんだ。」

成る程…。

大体の察しはついた。

ツエルプストーは、俺とタバサが犯人だと思っているのだろう。

俺はヴァリエールの人間だから、ツエルプストーに恥をかかせようとしたのかなんとか邪推してんだろ。

タバサについては解らんが、何か後ろめたい事があるんだろう。

「もしかして…」

流石のギーシュも気付いたようだ。

「君達が疑われているのか？」

「だろうな。」

そういや、ツエルプストーは復讐するみたいな事を言っていたよう  
な…。

「ギーシュ、ちょっと確かめたい事が出来た。」

「何処へ行くんだ？」

「俺の部屋。」

俺は自分の部屋まで急いで戻った。

復讐するなら、俺を直接狙うか、部屋の私物を狙うと考えたからだ。

だが、その推察は最悪の形で裏切られた。

「部屋を荒らされた形跡は無いか…。まあ、トライアングルクラスの  
のロックを破るのは無理だろな。」

部屋を確認しつつ、俺はこの後どうしようかと考えていると…

「お兄様っ…!!」

「ルイズ？ どうした？ 泣いているのか？」

涙を流したルイズが俺の部屋に飛び込んで来た。

「私の…私の部屋が…」



っ……まさか!?

俺はルイズを連れ、大急ぎで女子寮に向かった。

ルイズの部屋に入ると、部屋の中は惨状を呈していた。

火の魔法を使ったのだろう、焦げた臭いが立ち込め、クローゼットの中の服や、ベット、机の上の小物。

ありとあらゆる物が焼かれていた。

「……ふざけやがって。……ルイズは関係無いだろ!」

「ぐす……お兄様?」

「ルイズ、先生にはまだ言うなよ。とりあえず、俺の部屋に行っていくろ。」

俺は、ツェルプストーの部屋に向かう前に、一旦タバサの部屋に向かった。

タバサの部屋の扉をノックする。

「誰?」

タバサにしては珍しく、感情の籠った言葉だった。

「俺だ。レオハルトだ。少し話がある。」

タバサは一言、「入って」と言って、俺を部屋に入れてくれた。

タバサの部屋は、ルイズの部屋と同じく、酷い有様だった。

「酷いな……本棚なんか特に……大切な物だろ？」

「うん……」

悲しそうに呟くタバサ。

その姿は痛々しくて見ていられなかった。

「ロックの魔法はかけてなかったのか？」

「たまたま忘れていた。」

そいつはタイミングの悪い……

「レオハルトは？」

「俺の部屋は大丈夫だった。けど……代わりにルイズの部屋がな。」

「そう……」

「……犯人に目星は？」

「図書館で話し掛けて来た人。気になって調べたら……」

タバサの話を聞くと、俺と同じように、昨日の事件を調べたようだ。

「そうか。…勘違いとはいえ、あいつは俺達の一番大事なモノを傷付けた。」

「うん」

「なら、やることは一つだ。俺達は正々堂々と、復讐しようじゃないか」

## 第九話　二度目の決闘

俺はタバサを連れ、ツエルプストーの部屋の前まで来ていた。

「出てこいや糞女！」

「言葉遣い」

「関係ない！」

今にもぶち破りかねない勢いで、拳を扉にたたき付ける。

「五月蠅いわね！　誰よ！」

ツエルプストーは、俺達の姿を確認すると唇の端を吊り上げ、気味の悪い笑みを浮かべた。

「何のよう？」

「杖を持って表に出ろ」

「やる気になったのかしら？」

「やる気にしたんだろ？」

礼によってヴェストリの広場に來た俺達。

周囲にはギャラリーの姿は無かった。

「とりあえず、そちのミス・タバサには謝罪申し上げるわ。あなたの名前をからかった事…。」

「……」

タバサは何も答えない。

なので俺が代弁してやる。

「御託は良いから早く始めようだと。」

本当にそう思っているかはわからないが、多分そういう事を言いたいのだろう。

「二人の間に言葉はいらない……お熱いわね…。」

ツエルプストーが何を言いたいのかさっぱりわからない

「なんでも良いが、どっちが先に相手をするか選んでくれ。」

「二人まとめて相手をするわ。二人を引き離すなんて野暮はしないわよ。」

「ふん……後悔するなよ。」

「そっちこそ、ツエルプストーの女を甘く見ないことね。」

ツエルプストーは自信たっぷりにそう言うと、その豊満な胸の谷間から杖を抜いた。

「行くわよ……！」

ツエルプストーは口元を隠し、魔法を悟られぬよう素早く詠唱を始めた。

「…！」

タバサが杖を構え、魔法に備えようとしたが、

「守りは任せろ」

俺が代わりになる。

「ファイヤーボール！」

「エア・シールド！」

俺はツエルプストーの魔法にエア・シールドで対応したが、防ぎきれず、火の粉が少し飛んでくる。

「熱っ！」

髪が少し焦げた。

というか、任せろとか言ったのに格好悪いな…

「!」

次はタバサが攻撃をした。

以前見たときよりも圧倒的な数の氷の矢がツエルプストーを襲った。

ツエルプストーも防御魔法を使うが、全てを無効化出来ず、一本が頬を掠めた。

そこで俺達は手を止めた。

「参っちゃったな…。勘違いみたいね…」

ツエルプストーは俺達の魔法を一通り見て、自分の間違いに気付いたようだ。

トライアングルクラスのメイジになれば、自分の受けた魔法がどの程度のモノかわかるのだ。

「誤解が解けたみたいで良かった、けど、こちらは気が収まらないんだが…」

俺がそう言うと、タバサが俺のマントを引っ張った。

「この人の魔法じゃない」

「そうなのか？」

「この人の魔法なら、私の本は原型を留めてない。」

「成る程。それは言えている。」

「どういう事？」

ツエルプストーが俺達の会話の意味を尋ねて来た。

「実はな……」

ツエルプストーにこれまでの経緯を説明しようとした時。

「危ない!!」

ツエルプストーの言葉に俺はいち早く反応した

「何!？」

後ろを振り返ると、俺達三人に向かってファイヤーボールが飛んできていた。

ツエルプストーは既に回避行動をとっていたが、俺とタバサは背後からの攻撃に反応出来てない。

「くっ…!」

俺はなんとかタバサを突き飛ばし、ファイヤーボールの射線から外した。

しかし、俺は回避が間に合わず、上半身の左側、顔と左手に直撃した。



「つあああああ!!」

先程の火の粉とは比べものにならない熱と激痛が身体に走る。

「:!!」

立ち上がったタバサが水魔法を使って火を消してくれた。

「あああああ!」

水が傷に染みる。

「直ぐに水の使い手と秘薬を!」

タバサがツエルプストーに指示しているようだ。

「わかったわ!」

その後、俺は保健室に運ばれ直ぐに治療が始まった。

しかし、火傷に効果のある秘薬が無く、顔と左腕に火傷の跡が残ってしまった。

その後は、俺の怪我を聞き付けたルイズやら、事情を聞きに来た教師の相手をする事になった。

そして、今回の事件はツエルプストーを嫌っている何人かの女生徒とロレーヌの仕業だというのが判明した。

彼女達は責任を取られ学院を退学、そして彼女らの親は俺の親父

に謝罪やら何やらを求められる事になった。

ざまあ見ろ。

その日の夜。

俺が保健室のベッドで寝ていると、誰かの気配を感じた。

「誰だ？」

杖を構え、警戒しつつ話し掛ける。

「私達よ」

月明かりに照らされたツエルプストーとタバサがそこにいた。

「なんだ…」

杖をしまい、安堵する。

「可愛い彼女がお見舞いに来てくれたんだから、もう少し喜んだら？」

「誰が？」

ツエルプストーが俺とタバサを指差した。

「……はは、それは誰から聞いた？」

「ロレーヌ…あつ、これも私を嵌める罠だったの？」

どうやら、ロレーヌは俺とタバサが恋人同士で、協力してツエルプストーを襲わせたと思わせたようだ。

「当たり前だ…。なあ、タバサ？」

俺は同意を求めようとタバサの方を見た。

「……恋人……私が…」

そこには、頬を赤く染めた可愛い少女の姿が…

「ツエルプストー。一先ず出て行け。」

「はいはい…。それと、私の事はキュルケって呼んでね、レオハルト。」

「わかったから行け。」

キュルケは一言、「ごゆっくり」と言い残すと保健室から出ていった。

さて、どうするか…。

この状況、真夜中、保健室、若い男女が二人きり。

俺も健全な男だ、何かを期待してしまうのも無理は無い。

実際、俺はタバサが好きと言える。

出会って間もないが、だからこそ彼女の事を知りたい。

よし！

意を決して話し掛ける俺。

「怪我は無かったか？」

「大丈夫…あなたが守ってくれたから」

落ち着いた様子のタバサだが、まだ頬は赤く染まっている。

「それは、庇ったかいがあった。」

「でも、どうして…？」

「可愛い女の子を守るのは、男の勤めだろ？ ……とかカッコつけてみたけど……俺じゃ格好悪いな…」

言い切るのが恥ずかしかったので、ちよつとごまかす。

「そんな事無い。かっこよかった。」

顔に熱が籠る。今度は俺の顔が真っ赤だ。

「……………」

「……………」

沈黙が訪れるが、嫌な雰囲気じゃないが、俺は沈黙に耐え切れ無かった。

「そ、そういや！ 本は全部ダメだったのか？」

「うん…」

しまった……話題の選択を間違えたか…！

慌ててフォローをする

「俺で良かったら、その……本の代わりになる……けど……」

何変なこと言ってんだよ俺は！？

こっ……こんなまるで…

「それって……どういう…」

ぬああああああああ！！

「タバサ！ 俺と……」

そこまで言いかけて口ごもってしまった…。我ながら情けない…。

「俺と……？」

タバサは首を傾げて聞いてくる。仕種が日々可愛い。

「…友達になってください。」

………あぁ………

「…うん」

## 第十話く兄の苦悩く

翌日、教室にて。

「レオハルト！ ルイズから色々聞いたよ。大変だったみたいだね。」

休み時間、遠巻きに俺の火傷を見つめるクラスメイトを尻目に、話し掛けて来たギーシュ。

「まあな。」

俺は左頬の傷痕を触りながら答えた。

「高名な水の使い手に頼めば、痕を消して貰えるんじゃないか？」

それについては昨日、タバサにも同じ事を言われた。

しかし、俺はこう答えた

「タバサを守った証だからな。勲章のつもりでこのままにしとくよ。」

それを聞いたタバサは、表情こそ崩さなかったが、また頬を赤らめた。

タバサは、普段は無表情だが、その分、感情豊かな表情を見せた時、俺は凄くドキドキする。

俺はタバサの事が好き…なんだろう。

タバサはどうだろうか？

俺の事をどう思っているんだろ？

「タバサも同じだと嬉しいんだけど…」

「はっ？ ミス・タバサがどうしたって？」

どうやら、口に出して言ってしまったようだ。

「詳しいや…。な、何でもない！」

慌てて訂正したが、間に合わなかったようだ。

ギーシュの顔が、『面白い事聞いた』と言わんばかりに笑顔になっていく、キモい。

「レオハルト？ ミス・タバサと何かあったのか？ いや、何かあったな！ 白状したまえ！」

「何も無い！」

くそっ……失態だった…

まさか、ギーシュに揚げ足取られるとは！

「本当か？ 怪しいな…」



そして、この最悪の状況を更に酷くする人物がやって来た。

「ツエルプストーの女がお兄様に何の話が有るって言うのよ!」

ルイズとキュルケ……そしてもう一人

「レオハルトに話があるのは私じゃなくてこの子よ。」

そう言って、キュルケはタバサの頭にポンと手を置いた。

そう……タバサだ

「なんでアンタがお兄様を呼び捨てにしてるのよ!」

「友達だからよ」

「何時から!」

「昨日から」

ああ……最悪の状況、最悪のタイミング、そして最悪の三人……訂正、一人は最高、My sweet angel。

いやしかし!

本当にタイミングが悪い!

「おはよ、レオハルト。昨日ぶりね。」

「おはようキュルケ……。今日は、どうしたんだ?」

恐る恐る…しかし、キュルケには悟られぬように話しかける。

「この子が改めて御礼が言いたいって。」

そしてキュルケは、タバサに「ほら」と背中を押して言った。

タバサが俺の座る机の前に立った。タバサの隣に立つルイズの顔が怖い。

「昨日は本当にありがとう。」

「れ、礼なら昨日聞いた…。」

人に感謝される事の少なかった俺は気恥ずかしさと、タバサからの御礼でもう頭の中がめちゃくちゃだ。

「……それじゃ。」

それだけ言うとタバサは教室から出て行った。

「…………え、ちょ、タバサ？」

キュルケが呼び止めるが無視。俺は少し傷付いたが…タバサの顔を見るといつもの無表情とは少し違っていた。

照れ隠し……俺はそう考える事にした。

「あの子……まったく何を考えているのか謎だわ。」

俺は何となく解るけどな。

「で、昨日あの後どうなったの!？」

俺はうなだれた。一番来て欲しくない質問が来てしまったのだ。

ギーシュもルイズも興味津々…。

「…仕方ない……あの後…」

俺は渋々、仕方なく、嫌だけど昨日のタバサとのやり取りを説明した。

勿論、俺の恥ずかしい台詞は省いてだ。

「なんだ…。キスくらいしたものだと思ったのに。」

「そうだぞ、レオハルト! キスくらいしないと! ですよねミス・ツエルプストー!」

同意を求めるギーシュにキュルケは、「キュルケで良いわよ」と言っ  
て返した。

「な、な、何言ってるのよあなた達! キスなんて…! お兄様に  
変な事言わないで!」

キスカ……

タバサと…キス……

…良い……！

「お兄様は満更でもないみたいよ？」

「お兄様の馬鹿……！」

「ぶうつ！？」

ルイズにいきなり叩かれる。めっさ痛え…。

そして、ルイズも教室から出て行ってしまった。

「あーあ、行っちゃった。」

「まあ、授業になったら戻って来ないといけないけどね。」

「次は実技だからサボっても問題無いがな。」

追い掛けようもしない三人。

「しかし、レオハルト。ルイズのあの反応は兄妹のそれでは無い。」

「確かにね。兄に好きな人が出来て複雑な気分だと思うけど、あれは大袈裟よ。」

…思い当たる節はある。

ルイズは小さな頃、俺に惚れていた。

元来、人は同族嫌悪の特性があり、自分に近い血筋の異性をそうい

う対象から省くのだが、俺はルイズと血が繋がってない。

だから、幼い時に俺とルイズは相思相愛のような関係だった。ま、お互いそれが兄妹としてなのか異性としてなのか自覚は無かったけどな。

そして、俺は時間が経つにつれて世の中とか、常識とか、色々学ぶとルイズに対してそういう感情を抱かなくなった。

ルイズには婚約者も居たしな。

けど、ルイズが俺のように心変わりしたかは解らない。

そこが、俺の思い当たる節なのだが…

もしそうなら、早目にそれを断つ必要がある。

ルイズの為にもな…。

## 第十一話〈亜人の群れ〉

魔法学院夏休みまで約一週間まで迫ったある日。

「レオハルト！ オーク鬼退治だ！」

「は？ いきなりなんだよ？」

ギーシュが最近ナンパした女の子から、「学院の近くの森でオーク鬼を見かけて：私怖いです。」とかなんとか言われたらしい。

「んで、『この僕！ ギーシュ・ド・グラモンに任せたまえ！』とかカッコつけたのかドット風情が？」

「うん、大体そんな感じだ！」

そんな感じじゃねえだろ：

オーク鬼と言えば、人間の倍は軽くある身長、それに違わぬ太い腕や足、豚の顔を潰したような醜悪な顔面。

低脳、巨体、醜悪の三拍子の揃った亜人だ。

理性のかけらも無い奴らは、人間にとってまさに害獣以外の何者でもない。

「ま、オーク鬼退治頑張れよ。」

「手伝ってくれ！」

俺が冷たく返すと、間髪入れずに俺に手伝いを申し込むギーシュだった。

「言うと思った…。仕方ない…」

ギーシュの頼みを聞き入れるなんて普段なら絶対無いが…。

相手がオーク鬼なら話しは別だ。

前にも言ったが、俺はヴァリエール家の跡取りではない。俺はヴァリエール家を継ぐ気はないし、親父も継がせる気はない。

だから、俺は将来、軍か魔法衛士隊に入るつもりだ。

どちらになるかは使い魔によるな。ヒポグリフ、グリフォン、マンティコア等の幻獣なら魔法衛士隊に。

それ以外なら軍かな。竜も良いな。竜騎士に憧れる風の使い手は少ない。

とまあそんな訳で、俺はヴァリエール領に居た時から腕を磨いてきた。

オーク鬼も何十匹と狩ってきたし、一番大きな獲物ならワイバーンだ。

経験を積むには、人間のメイジが一番良いんだが、亜人も全力で魔

法を使えるから悪くはない。

今回もそんなノリだ。

「お兄様、ここはヴァリエールの領地ではないのですよ!?!? 危険な事はやめて下さい!」

と、ルイズに注意された。

「オーク鬼ぐらい大丈夫だって。俺が今まで何匹のオーク鬼を退治してきたと思う?」

と豪語しながらも、俺は慢心は自分の足を掬うというのを理解している。

というか、一回それで死にかけた。

「それは……」

俺の言葉に黙ってしまうルイズ。

「そんなにレオハルトが心配なら、一緒に行くかいルイズ?」

「何を言ってるんだ、バカ!」

ギーシュがとんでもない事を言い出したのですかさず反論する。

「良いじゃないか、どうせオーク鬼はレオハルトが相手するんだ。僕達は隠れて見てるから。」



どうせそういう事だろうと思ってたが、出発前に言うなよ。萎える。ってそうじゃない！

「そんな危険な所にルイズを連れて行けるか！ ルイズは魔法が…」  
言いかけて気付いた。ルイズは負けず嫌いだ。魔法が使えないのを相当気にしている。だから、ルイズの前でこんな事を言う…」

「ギーシュ、私行くわ！」

こうなるんだよ…

「僕が言っておいて何だけど、魔法が使えない君が来ても邪魔なだけだよ？」

それなら何故誘ったんだ馬鹿！

「つ、使えるもん！ いざとなったら…」

不安だらけで説得力がまったく無いな…。けど、こうなると俺じゃどうしようも無い。

「連れて行くしか無いか。責任取って死んでもルイズを守れよギーシュ。」

放課後、俺達は直ぐにオーク鬼退治に出かけた。

目的地は学院からそう遠く無い森だ。

この森には一部の学院生の使い魔なんかも住んでいたりしており、普通ならオーク鬼なんか入り込む余地なんか無いはずなんだがな。

「昼間だつてのに気味が悪いな…」

ギーシュが呟く。つか近い、背中にくつつくな気持ち悪い。

「無駄口を叩くな。常に周りに注意を払えよ。もしかしたら、俺達は既にオーク鬼のテリトリーに入っているかも知れないんだからな。」

俺の注意にギーシュが震え上がり、更に身体を密着させてきたキモい。

野郎に引っ付かれても一分も嬉しくない。ギーシュじゃなくてタバサなら良かったのに。

「……!?!? 止まれ。」

その時、パキッと枝の折れる音がした。誰かが踏み付けたのだ。

「どうした?」

「静かに!」

枝の折れる音、葉っぱの擦れる音が聞こえる…。

俺達は立ち止まっているからそれらの音をたてる事は無い。つまり…

「何かいる…。」

「な、何だって!？」

「…大丈夫…私は魔法が使える…今度こそ大丈夫!」

ギーシュは慌てて、ルイズは自己暗示。本当に頭の痛くなる二人だ。

「二人は木の上にでも隠れてろ。」

「わ、解った。」

「は、はい…。」

ギーシュは自分で、ルイズは俺が『レビテーション』を唱えて木の上に登った。

俺は耳を澄まし、足音が何処から、いくつ出ているのか確認する。

足音は無い…でも、荒い息遣いは聞こえて来る。数は一つや二つじゃない…。

「ちっ…数が多い…。」

先ずは相手が確認出来るまで近付かなくては。

聞こえて来る音を頼りに歩を進めて行くと、獣道が見えて来た。そして、そこには…。

「オーク鬼が約十匹か…。群れじゃないか…!」

一匹や二匹なら何の苦労も無しに正面から制圧出来るが、十匹もいると俺も“本気”を出す必要がある。

「先手必勝、先ずは奇襲で数を減らす。…ウル・カーノ・デラ・ソル……」

杖を二本構え、詠唱を始める。

風の二乗に火の二乗。スクウェアアークラスの『フレイム・ストーム』。俺が炎風と呼ばれるきっかけの魔法だ。

あの時は力を抑えて、風の二乗と火が一つだったが今回は違う。

本気で敵を殲滅する。

「燃やし尽くす、『フレイム・ストーム』!!」

オーク鬼の群れに向かって、二本の杖を同時に振りかざす。

すると、群れの中央から炎を纏った竜巻が発生し、周囲のオークを巻き込む。

竜巻の中では、風の刃で傷付き、全身を炎に焼かれ、のたうつオーク鬼の姿が。

竜巻から逃れたオーク鬼は四匹、それならば正面から正々堂々倒せる。でなければ修業にならない。

俺は獣道に飛び出し、二本の杖でブレイドを唱える。刃の色は、片方は緑で片方は赤だ。

二刀流のブレイドは特異なメイジの俺だから出来る技だ。これを本気で極めれば…！

「チエストオオオオオオ！」

先ずは一匹。オーク鬼は先程の攻撃で浮足立っており、俺の存在を認識していない。

オーク鬼は生命力が高く、傷が浅いと思わぬ反撃を喰らう恐れがある。だから、一撃で仕留めなければならぬ。

「ぶぎい！ ひぎぎ！」

「相変わらず、断末魔も聞くに耐えない醜さだ。」

二本のブレイドでオーク鬼の胸を貫く。

オーク鬼の皮膚は厚く、下手な武器では致命傷を与えられない。その点、ブレイドは岩すら両断する強力な魔法だ。問題無い。

「次、二匹纏めて行ってみるか？」

反撃に出て来たオーク鬼の混紡を、バックステップで躲していく。

振り下ろされた混紡が地面を叩く。すると、近くの木が揺れる程の振動が発生した。

「きゃあああ！」

「うわああああ！」

ルイズとギーシュの悲鳴が聞こえる。木の上に逃げたのが災いしたのだ。二人は今にも落ちそうだ。

「くっ…！」

その悲鳴を聞き付けた残りの一匹が、二人の登った木に近づいていく。

「しまった！ ギーシュ！ そっちに一匹行った！ なんとかしろ！」

「何とかしろって…うわ！」

ギーシュは力が抜けたのか、枝から手を離してしまい地面に落ちた。幸い、茂みに落ちたのか怪我は無いように見える。

「ぷるぐぐ！」

そんなギーシュに、ゆっくりと近づくオーク鬼。生意気に舌なめずりなんてしてやがる。

「ギーシュ！ 戦え！」

「うええ！？ 行け、ワルキューレ！」

慌てながらも杖を振るい、その二つ名の通りの青銅のゴーレムを作り出した。

一体のワルキューレがオーク鬼の腹に短槍を突き立てるが、厚い皮膚と脂肪に阻まれ致命傷とはならなかった。

「ギーシュ！ 身体の付け根と目を狙え！」

それを聞いたギーシュは、七体のワルキューレで一斉攻撃を開始、首やら腋やら皮膚の薄い部分を集中攻撃。

更に、七体のゴーレムに乗りかかられたオーク鬼は地面に倒れ、足の付け根を切り付けられた事で立ち上がれない。

「ふぎゃああ！ ふぎいつ！」

もがくオーク鬼に七体のワルキューレは容赦無く短槍で突きまくる。血飛沫が飛び、内臓がぶちまけられる。その様は、まるで鳥葬のようだ。

全身穴だらけ、内臓もぐちゃぐちゃになったオーク鬼はとうとう動かなくなった。

「やった……倒した……」

腰が抜けたのか、地面にへたり込むギーシュ。

「こっちも片付いた。やったなギーシュ。」

賛辞の言葉に、渴いた笑いで返すギーシュだった。

その後、ギーシュはオーク鬼を倒した証として耳を切り取り、例の

女の子に見せたらしいが：

「気持ち悪い！」

とか言われてしまったとさ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4321w/>

---

ゼロの使い魔～虚無のお兄様～

2011年10月10日13時56分発行